

年間第二主日

2019.1.20

ヨハネ 2・1-11

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日の年間第二主日にヨハネ福音書のカナの奇跡の箇所が朗読されるのは、これがイエスの行われた最初のしるしであり、それによって、ヨルダン川での洗礼の場面で、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と天の御父に呼びかけられたイエスが、わたしたちの中で神の子として初めて、その栄光を現されたからです。今日の福音はヨハネ福音書 2 章の最初に語られている出来事ですが、少し戻って、ヨハネ福音書のこの箇所の前の所から読むとイエスと出会った弟子たちがイエスの後につき従って、イエスと一緒に今日のカナの婚宴に招かれたことになっています。そして、今日の福音の最後には、この奇跡の場に居合わせた弟子たちが、イエスの栄光のしるしとしてのこの出来事を知って、イエスを信じたと言われています。

新年を迎え、お正月を過ぎたばかりのこの新しいも半月が過ぎました。わたしたちを取り巻く社会の動きは留まることなく、その中に生きるわたしたちの生活もまたいつものあわたしさに囲まれています。そのような社会と生活の中にあって、わたしたちはこうして日曜日、ミサにあずかり、聖書のことばに耳を傾けます。それは、わたしたちの日々の中にわたしたちが信仰において出会った、福音書に語られているイエスがともにいてくださることを信じているからです。クリスマスわたしたちがお迎えした人となられた神の子イエスは、あの誕生の夜と同じように、わたしたちの中にその居場所を求められます。その居場所は、最終的にはわたしたち一人ひとりの心のうちにありますが、このようにめまぐるしい社会の中に、自分の生活に忙殺されているわたしたちの心の扉が開かれるために、わたしたちはこのミサのひと時を必要としているのです。そこにおいて、わたしたちが信じるイエスは、福音書に語られている弟子たちが出会い、その後について行ったイエスであることを思い起こさせられるのです。わたしたちの心が開かれ、ミサの福音のたびに聴くイエスのお姿に、わたしたちの心の目を向けることが出来るなら、そしてミサの中で心を落ち着かせ、イエスご自身の御からだである聖体を、そのようなものとしていただくことが出来るなら、わたしたちのこの日々は、イエスの弟子たちが過ごした日々と同じように、イエスとともに歩む日々となることでしょう。

今日の福音のカナの婚宴の場には、イエスの母マリアがおられ、イエスとその弟子たちもそこに招かれたと語られています。けれども、誰がイエスとその

弟子たちをそこに招いたのかは語られていません。マリア様がどのような関係でそこにおられたのかも語られていません。弟子たちはおそらくイエスがそこに行かれることになったので、イエスと一緒におよびれすることになったのでしょう。わたしたちがイエスと聖母をお招きするとしたら、それは大事で、緊張のあまり夜も眠れないことになるかもしれませんが、わたしたちが日曜日のたびにここでお会いするイエスは、わたしたちよりも先にここにいてくださり、わたしたちもまた招かれた者としてこの場でイエスと席をともにしているのです。あるいはあの弟子たちのように、イエスがここにこうしておられるから、イエスの弟子であるということで、大丈夫、君たちもここにいなさいとイエスに言っていたら、ここに招かれているのです。そしてイエスが水からぶどう酒に変えてくださった、ふるまいの杯を味あわせていただくのです。

弟子たちも、弟子たちと一緒に席についていた婚宴の客たちも気づかなかったことでしょうか、舞台裏では大変なことが行われていたのです。マリア様に促されたイエスのおことばに従って、召使たちは何故そんなことを自分たちがしなければならぬのか説明もないままに、大きな甕から水を汲んで、杯を水で満たしていたのです。それも、酒に酔った宴会の客たちの幸せそうな声が届いてくる薄暗がりの中で。わたしたちの生活や仕事も、多くの場合このようであるかもしれません。わたしたちにはそのようにしか思えないときが多くあるかもしれません。

カナの婚宴の出来事はイエスがそこにいてくださり、あのようなことをなさってくださったから、聖書に記される出来事となったのです。イエスとマリアはあの場に居合わせた全ての人を包んで、そこにいてくださるのです。喜びの宴の途中で、肝心のぶどう酒がなくなりかけていることにも気づかずにいる、新郎と新婦とその親たち、裏がどうなっているのか、そこでどのようなことが行われているのか、考えてみることもなく無責任に宴に興じている婚礼の客たち、裏の事情が分かっているがゆえに、これからどうなることかと気が気でない宴会の責任者、そしてそれが割り当てられた仕事だと諦めて黙々と、意味の分からない仕事を続けざるをえない召使たち、あのカナの婚宴の一部始終は、わたしたちの今の社会の縮図のようにも思えてきます。そしてイエスとマリアはあの時と同じように、それら全ての人々とそれぞれの思いを包み込んでそこにいてくださるのです。わたしたちの真ん中に、ここにいてくださるのです。

わたしたちが生きはじめたこの新しい年も、わたしたちが生きてきた全ての年つきと同じように、あのカナの出来事を繰り返すことでしょうか。だからこそ、あのカナの婚宴の席に招かれておられたイエスとマリアがわたしたちの中にいてくださり、この一年わたしたちがくみ上げるただの水としか思えないものを、香立つ感謝と喜びの杯に変えてくださるようお願いしたいと思います。